

堀辰雄のプルースト翻訳

戸塚 学

はじめに

マルセル・プルーストは、『失われた時を求めて』(1933年)によって、日本の文壇に大きな影響を与えた。この文脈で必ず言及されるのが、「新心理主義」^[1]と呼ばれる一群の作家が採用した、「意識の流れ」という小説手法の流行である。

「新心理主義」の主唱者伊藤整は、ジェイムズ・ジョイスが『ユリシーズ』(1923)の中で用いた「意識の流れ」——人物の意識の流動のままに現実を写し取る手法——を適用し、『薔の中のキリ子』(『文芸レビュー』昭5・11)以下の小説群を著した。また「ジェイムズ・ジョイスのメトオド」「意識の流れ」に就いて(『詩・現実』昭5・6)以下の

評論でその理論的根拠を示し、一連の発言は『新心理主義文学』(厚生閣書店、昭7)にまとめられた。内的リアリズムにより旧来の現実描写の超克を目指す伊藤の理論と実作は新進作家らに影響を及ぼし、文壇ではこの時期「新心理主義」と「意識の流れ」が議論の的となった。

これら「新心理主義」をめぐる言説の中で、心理を描く新手法の確立者としてジョイスと並んで言及されたのがプルーストである。伊藤整は「文学に於ける技術の方向」(『詩と詩論』昭5・9)で両者に言及し、「マルセル・プルーストとジェイムズ・ジョイスの文学方法について」(『思想』昭6・4)でその手法を対比的に論じた。伊藤はジョイスとプルーストの違いを論じたが、「新心理主義」をめぐる二次的な批評が積み重ねられる過程で、両者の差異は次第に見

失われていく。⁽²⁾ 日本におけるブルーストは、「新心理主義」作家の「意識の流れ」手法の規範として、ジョイスと同一視する形で論及されたのである。

「新心理主義」の一人に括られる堀辰雄とブルーストの関係も、文学史的には「意識の流れ」手法の導入という流れの中に位置づけられる。⁽³⁾ 個別の作品論でも、連作『美しい村』（山からの手紙）、「大阪朝日新聞」昭8・6・25、「美しい村」或は小通走曲、「改造」昭8・10、「夏」、「文芸春秋」昭8・10、「暗い道」、「週刊朝日」昭9・3・18）に結実する、無意志的記憶——感覚的刺激を契機とする過去の経験の現前的な回帰——の導入が主に論じられてきた。⁽⁴⁾

だが、堀は昭和六・七年における文壇での流行に先立ってブルーストに注目し、方法論議を主体とするブルースト現象には微妙な距離を置いていた。堀は神西清とともにブルーストの紹介を先導し、『失われた時を求めて』の翻訳を編集者として世に送り出した。また、ブルーストをめぐる一連のエッセイを発表し、その中で『失われた時を求めて』を翻訳して提示した。堀は当初より一貫して、翻訳という形でブルーストに関わっていたのである。次節ではまず、堀辰雄を視座に昭和初年代のブルースト受容の流れを捉え直す。

一

大正期のジャーナリズム及びアカデミズムにおける紹介に続き、ブルーストにいち早く注目した文学者は、神西礼吉（清）主宰の文学雑誌「虹」（創刊号誌名「筈」、大15・9、昭2・11）の同人達であった。同人は堀辰雄、大野俊一、吉村鉄太郎（片山達吉）、青木晋（竹山道雄）ら、府立四中ないしは一高の同窓生である。彼らは一高寮内で共有されたという「外国語の熱病」を背景に、海外文学の紹介や翻訳を盛んに行い、当時の日本ではまだ広く知られていなかったブルーストを新文学の旗手として取り上げた。

まず神西清が、昭和二年九月号の「虹」に、ベルナル・ファイの評論「マルセル・プルウスト——悦楽の発明者——」を訳出した。続いて大野俊一がブルースト研究で著名なレオン・ピエール・カンクの「仏蘭西の文学」（「虹」昭2・11）を訳出、ここにもブルーストへの言及が含まれている。さらに「虹」終刊後も、神西はブルーストの処女創作集『楽しみと日々』から三篇を訳し（『悦楽と日々』断章）、「創作月刊」昭3・4）、吉村はアメリカの批評家マルカム・カウリーの「マルセル・プルウスト」（「創作月刊」昭3・4）を、堀はジャン・コクトーの追悼文「マルセル・プルウストの

声」〔文芸レビュー〕昭4・3)を訳出、大野はブルーストの書簡をめぐるエッセイ「マルセル・ブルーストの手紙」〔詩神〕昭4・6)を発表した。⁽⁷⁾

こうした動きを主導したのは、海外の新文学の動向に敏感だった神西清だと考えられる。神西は、昭和二年の夏に前掲ベルナル・ファイの評論によってブルーストを知った⁽⁸⁾といい、同年の十一月に『失われた時を求めて』を読み始めたようである。⁽⁹⁾ 重要なのは、こうした関心が神西個人のものととどまらず、堀を始めとする「虹」同人達と共有されたことである。同人の紹介は断片的な情報提示に過ぎず、本格的なブルースト読解の跡を示すものではないが、一つの雑誌共同体の中でブルーストへの関心を共有し、組織的に紹介を行った点で、「虹」の動向は先駆的であった。⁽¹⁰⁾

さらに、神西が「虹」で蒔いた種は、同人の一人堀辰雄の手を通して実を結ぶことになる。堀が編集同人、大野俊一が編集・発行者を務めた同人雑誌「文学」(第一書房)では、東京帝大仏文科卒業生の淀野隆三・佐藤正彰・神田龍雄・三宅徹三による共訳「スワン家の方——失ひし時を求めて」を創刊号から四号(昭4・10・5・1)まで連載した。翻訳掲載の背景について、堀は神西宛の書簡(昭4・8・15)で、「今年大学を出た奴が四人がかりでブルウストの「ス

ワン」を訳して持つてきた なかなかいい訳だ みんなの同意を得て載せて行くことにした」と記しており、堀が掲載を後押しした事情が窺える。⁽¹²⁾ 連載は四回で中断されるが、淀野らの後輩の久米文夫・井上究一郎の手で「作品」、「ブルウスト研究」誌上で引き継がれ、戦後の新潮社版完訳に至る『失われた時を求めて』翻訳の主流が形成される。⁽¹³⁾

作品が日本語で読めるようになると、ブルーストへの関心は文壇でも急速に高まる。伊藤整は「文学」誌上の淀野らの訳文を引用して前掲「マルセル・ブルウストとジェイムズ・ジョイスの文学方法について」を著し、連載をまとめた『スワン家の方I』(武蔵野書院、昭6)⁽¹⁴⁾を「名訳」、「信頼するに足るもの」と支持した(『スワン家の方』淀野隆三・佐藤正彰共訳、「新文学研究」昭6・10)。また中村光夫は「作品」連載時の同翻訳を「金玉の文字に接するような気持でよ」み、「新しい神託を聞くように、陶醉した」という。⁽¹⁵⁾ 当時の「作品」読者通信欄には、若き中村と同じように連載を待ち受けるように読み進める読者の声が寄せられている。昭和六年から七年前半にかけての新聞・雑誌上では、「新心理主義」の文脈でブルーストへの言及が集中的に見られる。このように、神西清から堀辰雄へとという線上から『失われた時を求めて』の翻訳が世に送り出され、誌上連

載と単行本刊行を契機にブルーストが流行現象化していくのである。

ところが、ブルーストが最も注目を集めたこの時期、堀と神西は表立ってブルーストに言及していない。⁽¹⁶⁾昭和六年四月に富士見高原療養所に入院した堀は、それを機に神西ら友人から『失われた時を求めて』を借り受け、本格的に読み始めたものと見られる。⁽¹⁷⁾そして流行が一段落した昭和七年の後半から、堀と神西はブルーストをめぐる一連のエッセイを書き始める。両者のエッセイは友人同士の私的な対話の形をとり、文壇の潮流とは微妙に距離を置くものであった。

堀の「ブルウスト雑記（神西清への手紙）」は、昭和七年八月号の「新潮」「樵の木」「作品」の三誌に同時に発表された。神西に宛てた私信の形式で、各篇の末尾に付された「七月三日」、「七月八日」、「七月十二日」の日付の順に一連の内容をなす。これらは翌月号の「文学」（厚生閣書店）誌上に「マルセル・ブルウスト（神西清への手紙）」（Ⅰ）（Ⅲ）として一本化して再掲された。⁽¹⁸⁾一方、神西は自身が主宰する同人雑誌「リベルテ」に、堀の「ブルウスト雑記」への言及——僕は最近、堀辰雄から「ブルウスト雑記」といふ手紙を、三通も貰った——を含むエッセイ「ブルウスト」⁽¹⁹⁾「昭和

7・11（8・1）を連載した。これらは以後に発表される堀と神西のブルースト論の中でも、質量ともに中心的位置を占めるものとなる。

注目したいのは、この二つのエッセイの中で、堀と神西がそれぞれ『失われた時を求めて』の一節を翻訳して提示していることである。当時のブルースト論の中で、論者が自ら作品を翻訳して引用することは稀であった。特に堀の「ブルウスト雑記」は、『失われた時を求めて』の一節をブロック引用の形で繰り返し掲げ、訳文の提示に誌面の多くが割かれている。改稿も多くは翻訳に関わるもので、たとえば二箇所にわたって『失われた時を求めて』のブロック引用が新たに付加されている。また（Ⅲ）末尾の「これだけ書くのも僕には容易ではなかった」という箇所が「訳すのも」と改稿され、「僕」の翻訳行為が前景化されている。このように、「ブルウスト雑記」は堀の訳文を包み込む形で書かれたエッセイであり、堀辰雄訳『失われた時を求めて』のアンソロジーというべき側面を持っていた。堀は「ブルウスト雑記」を神西への「報告書」と規定しているが、提示される訳文こそが、堀の読んだブルーストを神西に「報告」するものであった。

堀がブルーストを読み進めていた時期の短篇小説「燃ゆ

る類」(『文芸春秋』昭7・1)には、『失われた時を求めて』第四篇「ソドムとゴモラ」Iの一節が次のように取り入れられている。

私はその一瞬間、それらの白い花花が一せいに、その蜜蜂を自分のところへ誘はうとして、彼等の雌蕊を妙にコケティッシュにくねらせたのをひよいと見たやうな気がした。(「燃ゆる類」)

de même la fleur-femme qui était ici, si l'insecte venait, arguerait coquettement ses « styles », et pour être mieux pénétrée par lui ferait imperceptiblement, comme une jeune fille hypocrite mais ardente, la moitié du chemin. (「^{スタイル}」にある雌花も「雄花と」同様に、もし昆虫がやって来れば、『花柱』を蠱惑的にたため、昆虫が彼女らのより奥深くにはまりこむように——大人しそうでいながらその実情熱的な若い娘のように——気付かれぬように自分から昆虫の方に歩み寄っていくだろう。) *Sodomie et*

Gomorhe I

右のような記述の類似は両作の主題上の関連という観点から取り上げられてきたが、⁽²⁰⁾ここでは言葉の置き換えの過程に注目したい。引用部を対照すると、「styles」が「雌蕊」に、「coquettement」が「コケティッシュ」に「arguerait」が「く

ねらせた」と、原文の語句が日本語に置き換えられている。さらにこの一節は『麦藁帽子』(四季社、昭8)収録時、「めいめいの雌蕊を妙な姿態にくねらせる」と改稿され、「彼等の」⁽²¹⁾と「コケティッシュ」⁽²²⁾「coquettement」という直訳的な表現が削られる。このことはひるがえって、初出「燃ゆる類」が原文を参照し、その言葉を一語一語翻訳するやうに書かれたことを示している。

堀辰雄は、外国文学の翻訳を生涯にわたって行つた作家である。ところがブルーストに関しては、強い影響関係が指摘されながらも、作品の翻訳は行わなかった。堀辰雄訳『失われた時を求めて』を包含するエッセイ「ブルースト雑記」は、こうした空白を補うものである。また同時期の作品において、堀は『失われた時を求めて』の細部を翻訳するような形で取り入れている。これは、作品における一種の翻訳行為として捉えることができる。本稿は、「ブルースト雑記」の分析を基点に、堀とブルーストの関係を翻訳という視点から考察する試みである。

二

「ブルースト雑記」は「雑記」と規定されている通り、統一した主題や論理に基づいた文章ではない。たとえば

(Ⅰ)・(Ⅱ)は堀自身の著したものだ、(Ⅲ)はジャック・リヴィエールの講演「マルセル・ブルースト」⁽²²⁾の翻訳によって堀の意に代えている。論じられる内容も多様で、無意志的記憶に始まり、文体や時間の問題、人物描写の特徴や印象派絵画の影響などが触れられる。それらを日常の出来事——ブルースト的な夢や印象派絵画の購入など——から語り起こすのが特徴で、ブルーストを論じるというより、ブルーストを読み進め影響を受けていく一人の作家の経験の総体が提示されるのである。こうしたスタイルに、文壇での方法論議に対する差異化の姿勢が見て取れる。

だが、紹介される個々のエピソード以上に堀のブルースト体験をよく示しているのは、論述の合間に差し挟まれる『失われた時を求めて』の引用である。⁽²³⁾そこにはブルーストの原文を一語一語日本語に置き換えていく、翻訳行為という堀の経験が刻まれているからである。まず注目したいのは、ブルーストの長大な文章——主文から関係詞節が派生して複雑化していく独特の長文——を堀がどのようにに訳しているかということである。⁽²⁴⁾

私は私の叔母さんにお早うを云ひにその部屋へ這入る前に、私はちよつと次の部屋で待たされるのであつたが、そこにはすでに二個の煉瓦の間に火が熾されてゐ、

その火の前にはまだ冬らしい日射しが温まりに這ひよつてゐた。そしてそのため部屋中に煤煙のほひがこびりついてゐた。まるで、田舎によくある大きな竈口とか、古い館の煖炉の枠などのやうに。(さう云つたものの下では、人々は冬籠りの面白さを増すために、戸外に雪でも、雨でも、はたまた大洪水のやうな災害でもいいから起ることを願ふものだが……) (「ブルウスト雑記」(Ⅲ))

avant que j'eutrasse souhaiter le bonjour à ma tante, on me faisait attendre un instant dans la première pièce où le soleil, d'hiver encore, était venu se mettre au chaud devant le feu, déjà allumé entre les deux briques et qui badigeonnait toute la chambre d'une odeur de suie, en faisait comme un de ces grands « devants de four » de campagne, ou de ces manteaux de cheminée de châteaux, sous lesquels on souhaite que se déclarent dehors la pluie, la neige, même quelque catastrophe diluvienne pour ajouter au confort de la réclusion la poésie de l'hivernage : *Du côté de chez Swann I*

引用部は、主人公の幼年時代を回想した第一篇「スワン家の方へ」第一部の一節で、主人公の叔母レオニーの家の一室の独特の空気感を描写した箇所である。原文は、主文

“on me faisait attendre”（私は待たされた）から、“ou”, “qui”, “que”が導く関係詞節が派生し、人物の行為、場面の描写、具体的情景を離れた一般論が、分節されないまま一文のうちで次々と展開されていく。こうした文構造は、話者の想起に寄り添うように出来事を綴る同作の叙述形式と対応している。

堀の訳文は単語や構文の上での誤訳が多く流麗ではないが、人称代名詞の煩瑣な訳出に見られるように、原文独特の文構造を反映しようという意図が窺える。最初の一文は、「待たされるのであつたが」と接続助詞の「が」を用い、「火が熾されてゐ」と連用中止法で文を接続し、文頭から意味の塊ごとに訳し下ろしている。また「そこ」「その火」「さう云つた」と指示語を用い、原文の関係詞節を逐一訳文に反映させている。傍線部、“comme”（のように）が導く比喻の節を、「まるで」のやうに」と独立した一文として訳出するのも、原文の意味作用の流れを阻害しないための処理である。こうした訳し方は、淀野隆三・佐藤正彰らの先行訳にも見出されるものである。だが、佐藤がブルースト「独自の文体」を再現し「ブルーストの魅力」の伝達を目指したと振り返るその姿勢と、堀の翻訳の志向は微妙に異なるもののよう^②に思われる。

たとえば二重傍線部、淀野らの訳では「雨や雪やあるひは大洪水のやうな災難さへ」となっていると^③ころを、堀は「雪でも、雨でも、はたまた大洪水のやうな災害でも」と名詞の反復的並列を強調する形で訳す。「ブルースト雑記」の堀の訳文には、このように同一品詞の反復的並列を強調して訳す例がしばしば見られる^④。またこの箇所を含む波線部は、全体が原文にない丸括弧で括られ、話者による註釈的な挿入句として他の部分と区別されている。こうした丸括弧の用法は佐藤・淀野らの翻訳にも見出せるが、堀はその適用箇所を先行訳とずらし、あるいは範圍を大きく拡張している。避暑地バルベックのホテルの食卓上を描写した次の一節を見てみよう。

……まだ横に置かれてあるナイフのでこぼこな面、日光がその上に黄いろい天鵞絨を張りつけてゐる放り出されたナフキンのふくらんだ突起、その形の氣高い円味をかくも美しく見せてゐる半分空虚^{から}になつたコップ（その厚いガラスの底の透明なことはまるで日光を凍らしてもしたやうだ）薄暗いなりに照明^{あかり}できらきらしてゐる葡萄酒の残り、固体の移動、照明のための液体の變化、半分減つた果物皿の中で緑から青へ、それからまた、青から金へと移る李^{すもも}の變化、卓の上に拡げられた

布のまはりに日に二回は坐りにやつてくる年老ひた椅子たち、(その卓の上では牡蠣の貝殻のなかに、小さな石の聖水盤のなかにのやうに、数滴の水が残つてゐる)「プルウスト雑記」Ⅱ)

Le geste interrompu des couteaux encore de travers, la rondeur bombée d'une serviette dé faite où le soleil intercale un morceau de velours jaune, le verre à demi vidé qui montre mieux ainsi le noble évase ment de ses formes, et au fond de son vitrage translucide et pareil à une condensation du jour, un reste de vin sombre, mais scintillant de lumières, le déplacement des volumes, la transmutation des liquides par l'éclairage, l'altération des prunes qui passent du vert au bleu et du bleu à l'or dans le compotier déjà à demi dépouillé, la promenade des chaises vieillottes qui deux fois par jour viennent s'installer autour de la nappe dressée sur la table ainsi que sur un autel où sont célébrées les fêtes de la gourmandise, et sur laquelle au fond des huîtres quelques gouttes d'eau lustrale restent comme dans de petits bénitiers de pierre ; *A l'ombre des jeunes filles en*

fleurs II

二重傍線部、堀が丸括弧で括った箇所は、原文では一連の事物の描写の一部で、話者による挿入句には当たらない。それが堀の訳文では丸括弧が付され、事物の描写が話者の主観的な挿入句に収斂する形になっている。これはほとんど誤訳に近いものだが、先にも見たように堀はこうした処理をあえて行っているふしがある。堀の翻訳には原文の文体を忠実に再現するというより、プルーストの文体の特徴を探り出し、それを訳文において時に誇張・強調しようとする姿勢が見出される。

このことは、引用部のそれ以外の箇所の訳し方にもよく表れている。右の引用部は「プルウスト雑記」(Ⅱ)に先立ちエッセイ「日付のない日記」(「帝国大学新聞」昭7・5・2)でも引用されており、堀が早くから注目していた箇所だと考えられる。両エッセイの中で、堀は引用部に印象派絵画の影響を指摘している。なるほど、光の中で事物の色彩を描き出す引用部の描法は、プルーストが愛好した印象派絵画を連想させる。実際、引用部は印象派の先駆者とされるシャルダンの絵画「食器棚」(1728)に基づく描写なのである。⁽⁷⁾

プルーストの原文は、名詞と長い形容詞句の組み合わせを並列した特徴的な構文で書かれている。堀はこれを、名

詞と形容詞句の順序を入れ替えた形で訳している。堀がこの箇所の構文を意識して訳していることは、傍線部と波線部「la transmutation des liquides par l'éclairage」と「l'altération des prunes qui passent du vert au bleu et du bleu à l'or」を「照明のための液体の変化」、「緑から青へ、それからまた、青から金へと移る李の変化」と訳し、「transmutation」と「alteration」という異なる単語を、同じく「変化」と訳して反復感を際立たせていることにも表れている。形容詞句が後置される原文とは異なり、堀の訳文では重い形容詞句を最後に受ける名詞の反復感が強調される。事物の与える印象を等しい資格で羅列していくこの訳文の文体は、プーレストの原文とは別の形で、日常の事物の印象を点描した印象派の筆触に接近しているように思われる。堀はプーレストの絵画的な描写を、こうした文体において捉えようとしたものと考えられる。

三

興味深いことに、「ブルウスト雑記」の堀の訳文に見られる文体は、同時期の堀の作品の中にも見出される。印象派への言及を含む「日付のない日記」の掲載と同月に、短篇小説「馬車を待つ間」（新潮）昭7・5）が発表された。一

人の男の旅行を紀行文風に描いた同作の前半部で、乗合馬車に乗る主人公の「私」の視界には、次のような光景が飛び込んでくる。

あたりの風景はだんだんセピア色を帯びて来る。畑の中で夕日の最後の光らしいのを受けて一瞬間金色にひかる蜜柑を手にしてゐる子供等、蟹のやうな恰好をして片手に籠をかかへながら草を摘んでゐる娘等、馬車の窓から顔を出してゐる私に向つて何かを合図しようとするかのやうにはげしい身振りをしてゐる大きな樹木等、——かう云ふやうな風物を今私は生れて初めて見るのにはちがひないが、なんだか今までにもこれとそっくり同じ風景を何処かで見たことがあるやうな気がしてならぬ。私はこれとそっくり同じ風景を誰かの絵でも見たのか知ら。

「夕日の最後の光」の中に浮かび上がる農村の「風景」が「絵」の中の光景に類比されることは示唆的である。自然の風物を移ろう光の中で捉えたこの「風景」は、「日付のない日記」でも言及される印象派の絵画を思わせる。注目したいのは、それが形容詞句と名詞を組み合わせた特異な長文によって書かれていることである。

走る馬車の窓外に現れては消えていく事物は、波線部「子

供等」「娘等」「樹木等」と名詞一語で指示され並列される。個々の名詞には傍線部のような長大な形容詞句がかかり、「私」が馬車の中から捉える事物の印象が細かく綴られていく。小久保実は一用部を取り上げ、「淀野隆三氏他訳の「スワン家の方」に示唆されたのであらう」と述べているが、むしろこれは「日付のない日記」や「ブルウスト雑誌」(Ⅱ)において、堀の訳文の中に見出される文体である。堀は「馬車を待つ間」において、窓外を過ぎ去る風景の一連の印象の継起を、長い形容詞句と名詞を反復的に羅列する形で書きとめているのである。

同様の文体は、作中にブルーストへの言及を含む短篇小説「旅の絵」(「新潮」昭8・9)冒頭部にも見られる。「見たこともないやうな大きな鏡ばかりの衣裳戸棚、剥げちよろの鏡台、じゆくじゆく音を立ててゐるステイム、小さなナイト・テーブルの上に皺くちやになつて載つてゐる私のふだん吸つたことのないカメラヤの袋(私はそれを何処の停車場で買ったのだか思ひ出せない)、それから枕もとに投げ出された私のでないハイネの薄つぺらな詩集」というように、旅先の神戸のホテルで目覚めた主人公の眼に映る事物が羅列的に描写されていく。主人公が旅先の見慣れぬ事物を一つ一つ認識していく過程が、やはり長い形容詞句を名詞で

受けて並列する文体で書かれているのである。

堀辰雄のブルースト体験は、昭和八・九年の連作『美しい村』をその頂点とする形で論じられるが、同作に次のような一節が見出されることに注意したい。

……だんだんその別荘が近づくにつれ、私はますます心臓をしめつけられるやうな苦しさを覚え出したが、さていよいよその真白な柵のある別荘が私たちの前に見え出した時は、明りの一ぱいに落ちた芝生の向うの、すっかり開け放した窓のなかに、私に見覚えのある大きな円卓子の一部が見え、人々が食事から立ち去つてからまだ間もないといった風に丸められたナフキンだの、果物の皮の載つた皿だの、からつぽの珈琲茶碗だのが、まだ片づけられずに散らかつたまゝ、まぶしいくらゐ電灯をあびてきらきらと光つてゐるのを私は自分でも意外なくらゐな冷静さでもつて認めることが出来た。(『美しい村』)

引用部は、高原の「別荘」に滞在するある一家の存在感を、食後の「大きな円卓子」の上の事物によつて暗示した箇所である。波線部「ナフキン」や「皿」や「珈琲茶碗」といった事物は「まぶしいくらゐ電灯をあびてきらきらと光」り、ブルーストが卓上の什器を光の中で描き出したあの一

節を連想させる。主人公の「私」はかつて親密に交際していたこの一家との間に確執を抱え、そのことに心を脅かされている。そうした過去の外傷的な経験の回帰と、その過去から解放されている自己の発見の過程が、事物の印象を点描的に並列する文体によって書きとめられているのである。

『美しい村』は、「馬車を待つ間」や「旅の絵」とは異なり、全篇にこうした文体が張り巡らされているのが特徴である。「私」が滞在する高原の村の美しさは、「私」の認識に飛び込んでくる村の風物によって織りなされる。異なる季節や天候のもとで、極めて多彩な木々や花々、昆虫や小動物の様子が描かれ、そこに「私」を含む村の人々のエピソードが織り込まれる形でイメージが凝集されていく。このような「美しい村」の時空を作り上げるのが、事物の与える印象を書きとめる、点描法的な堀の文体である。従来、無意志的記憶や『失われた時を求めて』細部のモチーフとの類似が取り上げられてきた同作は、こうした文体的な試みの集成という意味でこそ、堀のブルースト体験の総決算と言うべき作品なのである。

おわりに

堀辰雄の「ブルースト雑記」と同じ頃、伊藤整編集の季刊同人誌「新文学研究」の特集号「ブルースト研究」（昭和7・9）が刊行された。海外のブルースト論の翻訳を中心に構成された同号は、ブルーストをめぐる初の雑誌特集号となった。次いで、昭和八年十一月刊行の『岩波講座 世界文学 近代作家論』（岩波書店）に、佐藤正彰が「ブルースト」を執筆、昭和九年二月号の「文芸」の小特集「マルセル・ブルースト」に、生島遼一が「ブルーストの人間喜劇」を、伊吹武彦が「ブルースト積義」を執筆した。いずれもブルーストについての基本情報を提示する内容で、以後のブルーストは学術的な研究対象へ移行していく。堀辰雄のブルーストへの取り組み方は、文壇での流行現象ともこうした学術的な研究とも異なるものであった。堀はブルーストの原文を翻訳し、翻訳を通じて事物の印象を点描する文体を作り出した。

堀は「ブルースト覚書」（『新潮』昭和8・5）の中の『失われた時を求めて』訳文に付した自注の中で、「ブルーストのなげやりな混雑した文体は私の簡潔な文体への好みを困らせる」と述べつつ、「さう云ふ忠実な混乱を欲しい」と記し

ていた。ここで堀がいう「文体」は、プルーストの原文の中にあらかじめ存するものというより、翻訳の過程を通して初めて見出されるものであろう。「プルウスト雑記」と同時期の小説群を検討すると、プルーストの文章の翻訳を通して、『美しい村』に結実する一つの文体が作り出される過程が見えてくるのである。

【注】

- (1) 「新心理主義」という文学史用語の定着過程については、曾根博義「新心理主義研究序説」(一)～(五)〔評言と構想〕昭50・6～56・6を参照。
- (2) 小林秀雄「心理小説」(『文芸春秋』昭6・3)、河上徹太郎「心理主義についての一私見」(『作品』昭7・3)など。
- (3) 安藤宏「小説の新世代」(『岩波講座 日本文学史』第十三巻、岩波書店、平8)。
- (4) 竹内清己はこうした影響の端緒を「本所」(『時事新報』昭6・3・21～27)に見出す(堀辰雄における西欧文学―プルースト受容―、「文学論藻」平18・2)。森脇善明「堀辰雄のプルーストとモリーヤックについての覚書」(『論集・堀辰雄』小久保実編、風信社、昭60)が「麦藁帽子」(『日

本国民』昭7・9)に、松田嘉子「堀辰雄とフランス文学(前編)―比較文学的アプローチ―」(『キリスト教文学』平1・7)が「恢復期」(『改造』昭6・12)や「燃ゆる類」(『文芸春秋』昭7・1)に同様の影響を指摘した。同時期の小品「花売り娘」(『婦人画報』昭7・3)にもこうしたモチーフが見出される。

- (5) 朝日新聞社の海外特派員、重徳泗水の『現代のフランス』(大阪屋号書店、大10)以下の紹介、仏文学者小川泰一の「マルセル・プルウスト」(『仏蘭西文学研究』大15・10)以下の論文など。つとに井上究一郎「山茶花」(『作品』昭8・1)が重徳に言及している。
- (6) 大野俊一「神西清と堀辰雄」(『新潮』昭34・2)。
- (7) それぞれ原典は以下のものと推定される。「仏蘭西の文学」の原典は未詳。
Bernard Fay, « Marcel Proust, inventeur de plaisirs », dans *Panorama de la littérature contemporaine*, Paris, Kira, 1925.
Marcel Proust, « Les regrets, rêveries couleür du temps V, XIII, XXIV » *Les plaisirs et les jours*, Paris, Gallimard, 1924.
Malcolm Cowley, "A Monument to Proust", *Dial*, March 1923.
Jean Cocteau, « La voix de Marcel Proust », *La Nouvelle Revue Française*, janvier 1923.

(8) 神西清「編輯後記」(「リベルテ」昭7・11)に、「僕がはじめてプルウストの名を知つたのは一九二七年の夏のこと、随分遅かつたのです。その二年前に巴里で出版されたベル

ナル・ファイの「パノラマ」を偶然手に入れ、その中にある「マルセル・プルウスト、快楽の発明者」といふ章を一読したのが、そもそも病気の起りでした」とある。

(9) 神奈川近代文学館蔵、堀辰雄文庫の「スワン家の方へ」I(第八十四刷) *Du côté de chez Swann I*, Paris, Gallimard, 1926)には、*“R. JINZAI”* (神西礼吉) の蔵書票が付され、表紙見返しに *“Commencé à lire : le 18, novembre, 1927”* (一九二七年十一月に読み始める) とある。同書には堀のものと推定される書き込みとは別に、単語の意味が細字で十九頁まで書き込まれており、神西の初読の跡と推定される。

(10) こうした昭和初年代の「虹」同人のプルースト受容は、後年クルティウス『現代ヨーロッパに於けるフランス精神』(大野俊一訳、生活社、昭19)に結実する。同書はクルティウスの著名なプルースト論を含み、大野が昭和十八年八月の出征に先立ち託した訳稿を竹山道雄が校正・あとがきを担当して刊行したものである。

(11) 堀が編集を主に担当し、深田久弥と大野俊一が校正を手伝ったという(福田清人「長谷川さんと第一書房の思い出」、『第

一書房 長谷川巳之吉』林達夫・福田清人・布川角左衛門編著、日本エディタースクール出版部、昭59)。

(12) 『堀辰雄全集』第八卷(筑摩書房、平9)。同書簡で堀は「文学」でプルウストを本格的に紹介したいと思ふ故、いろいろ君に忠告して貰ひたいと思ふ」とも記している。淀野隆三の回想によれば、翻訳の掲載の依頼は編集同人の犬養健から「堀辰雄君か永井龍男君かを通して」あり、「両君と一緒に犬養氏に会つて、掲載のことを相談した」という(「その頃の思ひ出」、『失われた時を求めて』月報Ⅱ、新潮社、昭28)。

(13) 第一篇「スワン家の方」の連載は「作品」誌上(昭6・9～昭8・2)で引き継がれ、第二部が「スワンの恋」(作品社、昭8)として、第三部が『土地の名』(作品社、昭9)として刊行された。第二篇「花咲ける少女の蔭に」は「作品」誌上(昭8・3～昭9・10)、「プルウスト研究」誌上(昭9・7～12)で第一部の半ばまで翻訳された。さらに井上完一郎が諸篇の訳を複数の雑誌に発表し、訳選集『心の間歇』(弘文堂書房、昭15)を刊行した。「プルウスト研究」誌に執筆者として名を連ねた仏文学者を中心に、戦後、初の完訳『失われた時を求めて』(新潮社、昭28～30)が刊行される。

(14) 「文学」誌上の連載は第一篇「スワン家の方へ」の第一部「コ

ンブレー」の「I」までで終わっており、単行本は「II」の全体を増補する形で刊行された。

- (15) 中村光夫「むかしの『作品』」(『作品』復刻版解説・執筆者索引) 日本近代文学館、昭56)。

- (16) 例外として、神西清訳のミドルトンのマリイ「ブルウストと近代意識」(『詩と詩論』昭6・9)がある。

- (17) 神西清宛書簡(昭6・2・23)、葛巻義敏宛書簡(昭6・4・16)など。渡部麻実「堀辰雄「ブルースト」に関するノート」(『昭和文学研究』平14・3)の調査を踏まえ、禹朋子はこの時期に堀が入手していたのは、少なくとも二分冊の「花咲く乙女たちのかげに」の第二冊、「ゲルマントの方」IIと「ソドムとゴモラ」Iの合冊、「ソドムとゴモラ」IIの三冊だと推定する(「ブルーストと堀辰雄——『燃ゆる類』の主題をめぐって——」(帝塚山学院大学研究論集)平16・12)。堀辰雄「二月の作品」(『作品』昭7・3)によれば、この時借りた書物を堀は後に神西からまとめて譲られている。

- (18) 以下、訳文の分析に際しては、改稿「マルセル・ブルウスト」を対象とする。

- (19) 神西清「ブルウステイアナ」(『リベルテ』昭7・11)、「四肢の切断」(『リベルテ』昭8・2)、堀辰雄「文学的散歩」(『リベルテ』昭7・11)、「文学的散歩—ブルウストの小説構成」

(『リベルテ』昭7・12)、「ブルウスト覚書(三十歳にならうとしてゐる詩人の手記)」(『新潮』昭8・5)、「フロウラとフォーナ」(『新潮』昭8・8)、「マルセル・ブルウストの文章」(『日本現代文章講座』第八巻、厚生閣、昭10)。

- (20) 禹朋子前掲論文、黒岩裕市「堀辰雄『燃ゆる類』の男性同性愛表象—マルセル・ブルースト『ソドムとゴモラ』Iとの比較から」(『文化表象を読む—ジェンダー研究の現在』プロジェクトD「日本文学領域」編集、お茶の水女子大学21世紀COEプログラムジェンダー研究のフロンティア、平20)。

- (21) このように『失われた時を求めて』の一節を日本語に置き換えて取り入れた例は同時期の作品に多く見られる。たとえば「麦藁帽子」の次の一節には、「花咲く乙女たちのかげに」IIの一節が次のように取り入れられている。

そのとき向うから、或ひはラケットを持つたり、或ひは自転車を手で押しながら、一ダースばかりの少女たちががやがや話しながら、私たちの方へやつてくるのに出会った。
(『麦藁帽子』)

Une de ces inconnues poussait devant elle, de la main, sa bicyclette ; deux autres tenaient des « clubs » de golf ; (見知らぬ少女のうちの一人は手で自転車を押しており、他の二人

はゴルフの《クラブ》を持っていた。『*A l'ombre des jeunes filles en fleurs*』Ⅱ

原文のゴルフ・クラブがテニス・ラケットに変換され、
“poussait devant elle, de la main, sa bicyclette”と“tenaient des « clubs » de golf”が、「自転車を手で押しながら」、「ラケットを持ったり」と日本語に置き換えられている。

- (22) Jacques Rivière, « Marcel Proust », *La Nouvelle Revue Française*, avril 1925. 「ブルースト雑記」が依拠している文献については、竹内清己前掲論文を参照。

- (23) 「ブルースト雑記」の内容面から、これを堀の創作との関連において論じた先行研究として、中村三春「意識・無意識・時間—堀辰雄の小説理論」(「堀辰雄とモダニズム」)、「解釈と鑑賞」別冊、池内輝雄編、平16・2)がある。

- (24) ブルーストの文体における関係詞節の持つ役割については、たとえばLeo Spitzer, « Zum Stil Marcel Prousts » in *Stilstudien* 2, München, Max Hueber Verlag, 1961を参照。

- (25) 佐藤正彰「ブルーストを訳した頃」(『世界文学全集』第二期第十四巻月報、河出書房、昭31)。

- (26) たとえば引用部に続く箇所、堀が「私は戸棚だの、筆筒だの、壁紙だの、もつとしやりしやりした、もつと微妙な、もつと好評な、しかしもつともつと乾燥した匂いを嗅ぐや否や、」

“à peine goûtés les aromes plus croustillants, plus fins, plus réputés, mais plus secs aussi du placard, de la commode, du papier à ramages,”と訳している箇所、淀野らの訳であれば「戸棚や食器棚や枝葉模様、壁紙の匂ひ——いつそ歯切れのよい微妙な佳い匂ひであるが、もつと乾燥してゐる匂ひ——を嗅ぐと直ぐ」となる。

- (27) この点については、Kyuchiro Inoue, « Proust et Chardin », dans *Études de Langue et Littérature Française*, Tokyo, 1962² 吉川一義「ブルーストと絵画—レンブラント受容からエルスチール創造へ」岩波書店、平20)などを参照。ブルーストは、若き日の美術論「シャルダン」(「Chardin」, dans *Contre Sainte-Beuve*, précédé de *Pastiches et Mélanges* et suivi *Essais et articles*, Pléiade, Gallimard, 1971. の一節を作品に転用し、その際主語と述語による一般的な構文を名詞と形容詞句を並列した構文に変換した。

- (28) 『失われた時を求めて』には、モネなどの絵画をイメージの上で原拠とする箇所が多く指摘されている(吉川一義「ブルースト美術館『失われた時を求めて』の画家たち」筑摩書房、平10、などを参照)。

- (29) 小久保実『新版堀辰雄論』(麦書房、昭51)。

*堀辰雄のプルーストの翻訳の引用は「マルセル・プルウスト」に拠り、それ以外の作品は原則初出誌に拠った。プルースト『失われた時を求めて』は神奈川近代文学館蔵、堀辰雄旧蔵

N. R. F. 旧版 *A la recherche du temps perdu* 及び、前掲 Jacques Rivière, « Marcel Proust » に拠って引用した。プルーストの原文の直後に付した丸括弧内の訳文は拙訳した。